

令和 6 年度の教育の実施状況について、以下に報告する。

I. 教育課程・教育活動の充実について

重点目標の今年度の方針・目標は以下の 2 点である

1. 専門職業人として主体的に考え判断し、責任をもって行動する力を育成する。
2. 他者と協働しながら目標を達成する力を育成する。

1) 年次別教育課程

3 学年が第 5 次新カリキュラムとなった。教育課程に基づき計画どおり実施できた。

1 年次 第 55 期生 43 単位 1,170 時間 (うち実習 2 単位 90 時間)

2 年次 第 54 期生 37 単位 1,095 時間 (うち実習 8 単位 360 時間)

3 年次 第 53 期生 23 単位 810 時間 (うち実習 13 単位 585 時間)

*3 年次に旧カリキュラム第 52 期生が在籍していたため、単位互換し所定の過程を終えた。

2) 講師依頼・実習施設状況

講師の協力のもと計画通り授業を終えた。依頼した講師の総数は 138 名。そのうち、新講師は 30 名、特別講義講師は 11 名である。今年度の講師一覧は別紙のとおり。

今年度の実習は、全学年が新カリキュラムとなり、小児看護学実習 I、3 年次老年看護学実習、統合実習において施設の拡大、母性看護学実習では、地域実習を導入することができた。学生達の看護体験の幅が広がり、地域で暮らす様々な健康レベルにある対象者への看護の学びに繋がっている。

3) 学生の指導状況

①1 年次学年目標:看護学校の生活に適応し、看護者として望ましい態度を身につけることができる。

看護を目指す者として学習がスタートし、看護師になるという心構えづくりの年次である。まずは、学校生活のルールや学習への取り組みなど、入学時オリエンテーションや HR、実習オリエンテーションなどをとおして指導してきた。入学当初から、忘れ物や授業に必要な教材が整わないことが多く、授業や試験への取り組みも、居眠りやアルバイトを優先する姿が目立った。また、周囲に与える影響を考え、場に応じた振る舞いがとれない学生も目立ち、幾度も担任団が指導してきた。しかし、戴帽式を契機に、「看護者として患者の前に立つ」という構えができ、振る舞いやその後の学習への取り組みにも変化が見られた。

<基礎看護学実習 I>昨年度の評価から、9 月に時期をずらし実施。学内で基本的な看護技術を学習し、受持ち患者の日常生活援助へ一部参加し、患者に行われる看護について関心を寄せ関わっていた。コミュニケーションをとって患者を知ることの大切さも学んでいる。

<地域・在宅看護論実習 I>10 月に実施。「まちなか」では、事業委託先が変更となり、実習開始オリエンテーションをその都度実施していただきスムーズに導入できた。通所介護、障害者施設、健診センターなど、それぞれの場で様々な利用者と関わり、地域に暮らす人々の健康レベルや生活形態が違い、それぞれの人生を有意義に過ごせるよう工夫して暮らしていることを学んでいる。多方面からその人らしい生活を支え、そのためのサービスや支援の必要性も学ぶことができた。

2 つの実習において、場に応じた振る舞いがとれず指導を受ける学生が複数おり、オリエンテーションの工夫など、臨地の場にでる心構えを育んでいく。

②2 年次学年目標:対象の状況に合わせた看護実践を責任をもって取り組み、看護に対する自己の考えを表現することができる。

各看護学におけるシミュレーション演習、専門実習が開始となり、対象に応じた看護活動の理解と実践能力を積み上げていく年次である。1 年次から実習期間が空くため、基礎看護学実習 II に向けて看護技術ゼミナールの実施や成人・老年援助論演習で、患者の目標や望む暮らしを踏まえ必要な看護を考え実践できるよう進めた。

＜基礎看護学実習Ⅱ＞昨年度同様 6 日間で実施。1 年次 7 月以来の病棟実習で、患者とのコミュニケーションは記録を埋めるための情報収集になり、援助を実施することに精一杯で、患者に関心を向けるには支援を要した。患者の経過や入院目的、患者の目標に基づき援助の意味を考えられる学生は少なく、日々の患者の反応の意味や援助の必要性をリフレクションすることで、患者の生活の変化や苦痛を考え、患者にとっての援助の意味を考えられるように変化した。また、場に応じた言葉づかいや振る舞いがとれず指導を受ける学生も増えた。意識しないで行動している学生も多いため、場を理解し、相手に与える影響を考え行動できるよう、タイムリーに伝え自身の行動の振り返りができるよう刺激していく。

＜基礎看護学実習Ⅲ＞7 月に実施。基礎看護学実習Ⅱの実習状況を踏まえ、患者の入院目的・治療方針から、患者の望む生活にそって、患者のニーズを充足するための看護の理解につなげた。患者が置かれている状況を理解し看護を考えるのには支援を要した学生も多く、指示されたことを実施する傾向が強く、看護者として自分で考え行動を起こすことが難しかった。患者がどうなれば良いのか、これからどのような暮らしを望んでいるのか、それを支えるために必要な看護は何か、看護過程の思考に基づき責任をもって考え、行動化できていくよう、実習目的の理解、場に臨む責任の自覚を育めるよう支援していく。インシデントも複数発生し、次年度は、安全に援助を行うために実習前に起こりやすいインシデントについてオリエンテーションを行う。

＜小児看護学実習Ⅰ＞帯広市保育所 7 か所、私立保育所が新たに 3 か所増え 11 施設、子育て支援センター 6 か所で実習した。保育所実習では、成長発達に応じた子どもへの関わりや安全な環境づくりについて学んでいる。保育士の関わりから、子ども達の個々を尊重し、生きる力を大事に育んでいる様子を学び、人の持つ力を尊重し関わることへの理解が深まった。子育て支援センターの実習では、地域で温かい見守りのもと、子どもとその家族の成長発達を支えるための連携や支援の必要性を学んでいる。また、消極的で指示待ちの様子や、困った事の相談が表現できない学生も複数おり、次年度も事前のオリエンテーションを工夫し意識づけできるよう働きかけていく。

＜成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ＞成人看護学実習Ⅰは急性期・周手術期実習で、1 週間シャドウイング実習と手術室見学、2 週目から受持ち患者の看護展開である。シャドウイング実習では、看護師の動きや看護師間の報告連絡相談場面をとおして、メンバーとしての役割の理解に繋がっている。手術室では、見学だけでなく医療機器の装着やガウン介助に多く参加し、その場の手厚い説明・指導を受け、手術中看護の意味づけができた。次年度は、受持ち患者の手術見学と変更するため、術前から術後をとおして周手術期看護の理解が深められるよう支援していく。受持ち患者に対する看護展開では、2 週間のうちに患者が退院し、2 人目を受け持つ学生が多かった。短期間の関わりの中で、患者をとらえ必要な看護を考え、その日の状態に合わせた援助を実施していくことには支援を要した。Ⅱは、慢性期・回復期であり、3 週間の受持ち展開である。慢性疾患を抱えながら、どの様に過ごしてきたのか今迄の生活を理解し、必要な看護を考えていくことが難しく、かなり支援を要した。成人Ⅰ・Ⅱともに、患者の反応に関心を寄せるというより、自分が聞きたいことを優先したコミュニケーションになっていた学生も多い。また、日々の援助計画の立案や援助の実施も、自分が行うことを挙げる傾向もあり、患者にとって必要な看護を考えていくことに指導を要した。日々の記録の修正や評価など完結しない学生もあり、誰のための何の記録かを伝えながら、看護に責任を持つ行動とはどのような行動なのか、具体化できるよう日々の指導の中で強化していく。

各看護学のシミュレーション演習では、昨年度の評価をもとに、臨地に近い状況設定を意識しながら進めてきた。3 年次の専門実習に向けて、臨床判断能力の積み上げを意識し、患者のために主体的に考え、行動していけるよう、今年度も評価を行い次に繋げていく。

③3 年次学年目標: 専門職業人としての責任を自覚し、主体的に役割発揮するための態度を身につける。

新カリキュラム 3 年次の初年度である。専門職業人としていよいよ社会にでる構えをもち、多様な場における対象者とその家族に必要な看護を考え、実践できる能力を積み上げる最終年次である。新カリキュラム初年度の年次として、場に応じた行動や振る舞いがとれること、周囲の人とのコミュニケーションや調整力の向上、臨床判断力の積み上げを意図した教育活動を受けてきた。実習の場も地域へと拡大し、教育理念で謳う「地域で暮らす人々の持てる力の発揮」「住み慣れた地域で暮らし続けることの支援」のため、看護職が担っている役割や姿勢について考え、行動化できることを願い、学内及び実習で支援してきた。

年度当初は、オリエンテーションで説明されても1度では理解できず行動化できないことも多かったが、自分達が何に向かうのか明確になるよう、目標を共有しながら進めた。看護観の醸成では、4月に先輩の看護観に触れ、8月にケーススタディ作成、2月に看護倫理、卒業シンポジウム、看護を語る会、卒業記念講演、卒業企画と1本の線を繋ぐよう看護に触れ考えることができた。新カリキュラム3年間を経て、多様な場の実習や講義内容から、様々な看護や多職種連携・協働に触れ、卒業時には各々の看護観を描いて巣立つことができた。

臨地実習では、統合実習迄の一般病棟は、**老年看護学実習ⅠⅡ**とのみとなり、老年看護学実習Ⅱは、できるだけ急性期病院以外の病院実習となるよう計画し、今年度、新たに協立病院での実習を開始した。

＜**老年看護学実習Ⅰ**>3週間受持ち患者の看護展開である。全員が急性期病院である帯広厚生病院での実習であり、治療の経過や高齢者の身体状況を踏まえた患者理解に時間がかかり、特に外科系病棟の実習では、タイムリーにアセスメントし必要な看護を考えること、日々の援助への実施にも支援を要した。内科系病棟では、それらが緩和する一方で、大きく変化しない患者への日々の援助の目的や計画に悩む学生も多かった。日々の援助の評価を丹念に行い、翌日の援助に繋がれることを支援していく。外科系・内科系で実習評価に差が生じており、疾病や治療の経過に応じた看護が展開できるよう、病棟との擦り合わせを行い支援する。

＜**老年看護学実習Ⅱ**>8名のみ厚生病院であったが、協立病院、第一病院、公立芽室病院の3病院で実習することができた。協立病院では、実習受入れ体制を整えていただき、スムーズな実習導入となった。3病院の受持ち患者は、入退院を繰り返し慢性的に経過している患者や、急性期治療を終えて在宅や施設への移行を控えた患者が多く、日々の関わりから、元々の暮らしや今後の希望を踏まえ看護を考える必要があった。いつもと変化がない高齢者の健康レベルに応じて、その日必要な援助を考えることが難しく、指導者との行動調整やケア計画を一緒に考え、共に振り返りを行うことで、主体的に考え行動していけていた。次年度は、実習時間・期間の短縮予定である。短期間の中で、患者の元の暮らしやありたい姿を知り、そこに向けた関わりができるよう、日々の関わりの意味づけを強化していきたい。

＜**小児看護学実習Ⅱ**>主に急性期や周手術期の児で、受持ち期間がほぼ2日間と短く、受持ち患者を持てずにシャドウイング実習で終了した学生も複数いた。主体的に児や母とコミュニケーションがとれず関われない学生もいたが、多くの学生が看護師の関わりを模倣しながら、児と家族に合わせたコミュニケーション、ディストラクションやプレパレーションに参加することができた。日々アセスメントしながら、翌日の関わりを考えていくことには支援が必要であるため、次年度も指導者に協力を仰ぎながら支援していく。

＜**母性看護学実習**>対象理解と看護活動の理解は難易度が高いが、指導者からのタイムリーで丁寧な説明を受けることで、理解に繋がっている。分娩件数の減少から産褥・新生児実習では、一部ペア実習を取り入れ、学生同士で場面を共有し、対象理解を深めていくことができた。また、今年度から帯広市・芽室町・音更町・幕別町において、地域実習が導入となった。病院だけでなく、地域で母子の生活の理解や、看護の継続性、多職種連携・協働の重要性について学び広がり、大変貴重な機会となった。一方で、地域実習の場で、時間通りに到着しなかったり、場にそぐわない服装で臨んだ学生もあり、オリエンテーションの内容を強化・検討する。

＜**精神看護学実習**>旧カリキュラムから大きな変更はない。病棟実習と地域の障害者施設の実習である。対象理解の点では、やはり精神症状に目が行きやすく、患者の反応を精神疾患からの影響と捉える傾向が強い。患者の反応を引き起こす要因として、患者の抱える不安や苦痛に目が向くよう、指導者が援助場面を共有し、意味づけの過程をとおして理解することができていた。地域実習では、昨年度の評価をもとに、学内で学びの共有を図った。施設やサービス利用の目的や、多職種連携・協働の理解については、連携場面の見学やスタッフからの助言や説明を受け理解に繋がっている。一部の学生が、利用者との距離感や接遇などで指導を受ける状況があり、場に合わせた行動がとれるよう支援していく。次年度「あうとりーち十勝」での実習が終了するため、他2施設で目標到達できるよう学びの支援を行う。

＜**地域・在宅看護論実習Ⅱ**>旧カリキュラム同様の実習展開である。それぞれの場において暮らしや療養生活を支えるための看護や、多職種連携の必要性について学んでいる。今年度訪問看護ステーションでの評価が上昇した。訪問目的について丁寧に説明いただいたこと、地域・在宅看護論の講義内容や実習場が地域に拡大していることの影響と評価する。どの施設においても、対象者とのコミュニケーション

や日常生活行動援助実施には支援を要するため、次年度は実習期間短縮に伴い、内容を検討し臨む。

＜統合実習＞3年間の総仕上げの実習である。協立病院が受入れ施設となり5病院で実習した。チームメンバーの一員として、受持ち看護師としての責任を果たせるよう、時間管理・多重課題への対応や、優先度を判断した報告、適切な相談行動がとれるよう支援した。また、患者の目標達成に向け優先度を考え看護過程を展開し、タイムリーな介入には支援を要した。次年度も、受持ち看護師としてケアの実施と評価の責任を果たすことの体験ができるよう、アセスメントに時間をかけるのではなく、優先度の高いものから介入計画を立案し、実践していけるよう支援していきたい。

次年度は、実習時間を1時間45分に変更するため、ほぼ全ての実習において実習期間が短縮となる。今年度の実習評価を踏まえ、臨地での体験を学内でどのように整理し、学びに繋げていくかを検討しながら進めていく。

④基礎看護技術の修得について

全学年新カリキュラムとなり、技術水準の変更やシミュレーション演習も関与し、3学年全般に技術の見学・実施経験が増え、特に与薬に関する技術の経験度が上昇した。1年次は、基礎看護学実習Ⅰの時期をずらし、看護技術の学習後の実習であったため、日常生活援助技術に一部参加ができ、経験率が上昇した。看護実践には、思考を具現化した看護技術の提供が重要であり、経験の積上げを意識していくことが重要である。しかし、ただ実施するのではなく、患者にとって必要な看護技術を安全に安楽に提供すること、その日の患者の状態に応じて、実施方法を調整して提供できることが望ましい。日々、指導者と調整を繰り返しながら、学生が意識的に経験を積めるよう支援していく必要がある。

⑤インシデント・アクシデントについて

発生総件数は31件、アクシデントは2件発生した。年次別では、3年次の13件、2年次15件、1年次3件であった。内容別では、「療養上の世話」が17件と最も多く、「診療の補助」4件、「感染・その他」14件である。「療養上の世話」では、「転倒・転落」が11件と最も多く、各年次で起きている。3年次では、患者の転倒リスクや患者の行動の予測の甘さから、患者の側を離れることが目立った。2年次は、患者の状態や指示の理解不足、看護師への遠慮などから声をかけずに単独実施になっている。1年次は、「確認できるひとがいなかった」が要因で、単独実施となっている。「診療の補助」は、いずれも「単独実施」で、治療の影響とリスクを「考えなかった」ために起きている。「感染・その他」では、「報告」に関することが9件、3年次に最も多く、「大丈夫だと思い」報告が遅れるケースが多かった。他に「記録・情報」が3件で、患者情報を扱っていることの責任の自覚と情報管理意識の低さが要因である。いずれも発生要因として「行動調整しない」が多い。特に、実習経験の少ない1・2年生は、場に慣れず緊張もあり、声をかけられない状況にすることが考えられる。

次年度は、より実習期間が短くなるためリスクの予測がより難しくなる。学生が患者にとって安全安楽な援助の実施ができるよう、具体的な行動調整を支援する。指導者との場面共有など協力を依頼し、患者の状態から予測できること、安全を守るための方法など伝えていただき、学生が責任を持って実施に臨めるよう支援していきたい。実習開始前のオリエンテーションの内容も検討していく。

Ⅱ. 学習への適応促進

1. 学生の主体性と学習の推進を目指した支援

○学習方法・学習習慣の確立

○目標を持ち努力できるための支援

教員は、「課題の受けとめや対処行動等、学生個々の反応への関心を高め、早期の状況把握を心掛ける。教務室内での情報共有」を目標とし支援した。

1)1年次:学生在籍状況 学期開始時45名、学年末44名 休学1名。

入学後から、学習方法や試験後の学習支援など、折に触れ担任団が支援した。入学者の背景も様々で、基礎学力にかなり差があり、個別支援が必要であった。学習への取り組みでは、授業設定の意味がわか

らず興味が持てなかったり、居眠りをする学生の姿も目立ち、授業のテーマやキーワードを意識しないまま授業を受け試験勉強を進めている状況もあった。また、アルバイト等で学習に時間をかけていない学生もあり、都度、面談や聞き取りなどを行い、学習方法なのか、学習時間の確保なのか、小集団や個別支援など学生の状況に合わせ、担任団がタイムリーに支援した。学習進度に合わせ、学習目的や内容についてオリエンテーションを行い、看護に繋がる大事な学習であるという意識づけを図り、目的をもった学習ができるよう動機づけが重要である。今年度は、基礎実習時期を遅らせたり、講師の都合で一部科目進度が後期へずれたこともあり、学内演習や臨床看護実践演習、行事など多重課題に追われ、昨年度よりも学生の負荷や疲弊度が高かった。次年度から2科目1年次の講義から多学年へ移行させ負荷を軽減する。休学者1名は、身体の不調が続き、今後の学習継続を検討することとなった。

2)2年次: 学生在籍状況 学期開始時44名、学年末43名、休学1名

講義・演習・実習と多重課題になるため、演習が立て込まないよう進度を検討し進めた。効率重視の与えられたタスクを達成するための学習となっていたり、自分のペースで学習に時間をかけない学生、自己認知の甘い学生など、指導を繰り返した学生も複数名いた。看護実践者として、学習を積み上げていく責任や姿勢が持てるよう、今後も継続的に支援していく。

休学者は、1年次から学習支援を継続していたが、看護の道を進むことに迷いが生じ、進路検討のため休学となった。

3)3年次: 学生在籍状況 学期開始時49名、卒業47名、退学2名

国家試験対策による学習支援と並行し、患者の看護実践に必要な事前学習や実習の整理など、実習への取り組み状況や欠席・欠課状況から、個別に確認・対応しながら支援した。年度当初から、1年間の見通しを持ち学習に取り組めるよう、個別の学習計画の確認や体調の確認をしながら、タイムリーな支援を実施してきた。旧カリキュラムの学生については、単位互換や現3年次の科目にないものの履修に関して、教務担当主任が関わり、見通しを持って履修・単位取得できるよう支援した。

退学者2名は、前年度休学した学生で、看護師となるための学習継続に困難を感じ、進路変更した。

III. 国家試験全員合格

1. 学習支援計画と要支援者への確実な支援

○学生の計画的・主体的な取り組みの支援

○要支援者の早期からの継続的な支援

1)1. 2年次

1年次は、年度開始と年度末に基礎模試、2年次は、国家試験対策として、4月に年間計画の共有、2回の模試を実施(7月、2月)、12月には、国家試験の出題基準や模試の活用方法、3月には第114回国家試験問題の解き直しを行い、国家試験への学習に向け意識づけを行った。両学年共に、模試の成績や学期末の学科成績から、下位の学生を抽出し、春期休暇中の学習支援の実施と、保護者面談を実施する。

2)3年次

4月のガイダンスから、国家試験に対する動機づけと目標共有を図り、学生達が見通しをもち学習に取り組めるよう支援した。模試は全員が5月、8月、9～10月、1月の4回と、冬期休暇前に希望者のみの実施で計5回実施。更に、専門業者の夏期・冬期講習への参加、1月の外部・学内教員による補講、2月には専門業者による学内講座の計画など、参加状況や取組状況を確認しながら、模試や予想問題の解き直しの方法などを共有し、学習に取り組めるよう支援している。要支援者は、第1回模試終了後から、下位の者を対象に解き直しの支援を実施。以降、模試の正答率や成績から支援者を分析し、学生の特徴に合わせ、問題の読み方・解き方を中心に、個別もしくは小集団学習で支援した。

国家試験受験者は47名。全員合格100%を達成できた。全国の合格率は90.1%(新卒者合格率95.9%)、合格基準は必修問題40点以上/50点、一般・状況設定問題は148点以上/250点であった。

今年度の難易度は高くなく、全般に過去問題や頻出問題が出題されている。新出題基準からの出題も複数問みられていた。状況設定問題では、過去に出題されていない疾患が出題され、診療の優先度を問う問題など、臨床に即した知識を問う問題も出題された。今年の傾向から、やはり出題基準を意識し、基本的な知識の積み上げを支援すること、「何を問われているか」を考え解いていける力を積み上げていく。今後も、学生の学習状況を早期に把握し、根拠を理解し判断する力や学習の積み上げを支援していく。

IV. 学生相談・学生指導の充実

1. 学生のメンタルヘルスとセルフケアの支援

カウンセリングを受けた学生は各学年で延べ8名。1年生5名、2年生3名であった。カウンセリングを受けた学生は、昨年度同様に、欠席・欠課や学習状況から、担任が学生へ打診しカウンセリングに繋がっている。各学年の学生の状況としては以下に述べる。

1年次は、入学迄の経緯の中で受診歴や心理的に支援を受けていた学生や身体不調が続く学生、**2年次**は、実習の欠席や実習記録の提出などが滞っていた学生であった。様々な背景のある学生が増えており、それぞれの学年でどういう時期に相談を必要とするのか、健康管理表の記載内容や、学習や実習への取り組み状況を勘案して、早期に学生のSOSに気付けるよう支援していく。

「カウンセリングを受ける」という事に抵抗や敷居の高さがあるため、学生への案内を変更し、相談を受けやすい体制を整えていく。

2. 主体的な進路決定と責任ある行動の支援

進路状況

就職 44名（93.6%）、十勝管内 44名

進学 3名（6.4%）

年次の状況に応じて、進路選択や進路決定に向けた指導を実施した。

1年次では、5月の個人面談の際に、看護学校選択の理由など確認し、学習への適応を支援している。また、病院の奨学金受給相談の際に、進路決定への自覚と責任を指導している。

2年次は、4月の進路ガイダンスを契機に進路の手引きを配布し、進路調べ学習や発表会実施。また、健康科学の講師や管内保健師による「保健師活動」の紹介、キャリア支援特別講義など、自身の進路やキャリアアップを考える機会を設けた。2月には全員面接を行い、3年次に向けて、就職や進学、憧れの看護師像の有無など確認をした。2年次の段階で、既に病院の奨学金受給者が多く、進路が決定している者も多い。看護師として就業した先の自分の姿や、自分の目指す看護師像を明確にし、3年次に目的をもって実習に取り組めるよう刺激していく。

3年次は、4月に進路ガイダンスを実施。進路や進学決定に臨んだ。今年度は、4月の担任からのオリエンテーションを受け、インターンシップへの参加や報告など主体的に行っていた。病院の奨学金受給により、就業先が決定している学生が多かったが、新実習受け入れ施設での実習体験が就職に繋がった学生もあり、実習体験からどのような看護を行いたいと考えるのか、看護観への刺激が重要である。願書や履歴書作成において、看護観や具体的な志望理由が記載できない学生もいるため、自分が体験した実習を想起させ、どのような看護実践だったのか、看護観は何かを考えられるよう、支援していく。

V. 今後にむけて

3学年が新カリキュラムとなった。教育理念に基づき、地域で信頼される看護実践者の育成に繋がっているか、段階的に点検・評価していく。入学してくる学生の背景も様々となり、学習推進力の低下も否めない。各年次の学生達の状況を細やかに捉えながら、看護者になるプロセスを支援していきたい。教員全体で学生の持つ力の発揮ができるよう、情報共有と連携を強化し、切れ目のない教育活動ができるよう尽力する。